かささぎ 通信 第96号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2020年　10月　9日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年九月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（1996年、刈谷市教育委員会）所収の「とんび凧」「柏野大納言」を読みました。

「とんび凧」（初出『赤い鳥』一九三四年十二月号）は兄と年の離れた弟の話です。兄は土曜日に学校から帰ると、山の向こうの親類の家へお歳暮を持って出かけます。帰りに町の文房具屋で、前からほしがっていた小さな地球儀と、弟のとんび凧を買ってくることになっていて、一円もらって出かけます。「お歳暮」「とんび凧」という取り合わせは、年末から年始を迎える時期の『赤い鳥』十二月号掲載作品に似つかわしい題材です。

兄はこの日、二つの失態をしてしまいます。一つ目は、文房具屋のショーウインドに飾ってあった九十五銭の万年筆を見て、そちらの方が欲しくなり、とうとう万年筆を買ってしまったことです。五銭では弟のとんび凧は買えないまま帰路につきますが、「気がとがめて」文房具屋まで戻って初めの計画通りにしようか迷います。悩んだ末、結局遅くなって家に戻ります。二つ目は、先に寝ていた弟が夜中に寝ぼけ眼で「あ、兄ちゃん、凧は？」と聞くのに対して「おもちゃ屋が火事で焼けちゃった」と出まかせを言ったことです。

でも兄を救ってくれたのは母親の態度でした。遅くなって親戚に泊まったものと思っていた息子から事情を聞き、「いいのいいの、泣かなくっても」と言います。「五銭のおつりで弟にせめて色紙でも買ってきてやればいいのに」と口にはしましたが、それは大人の考えでした。とにかくご飯を食べて寝かせます。翌日曜日の朝、もう一度町まで行って、凧のお銭は別にあげるから弟に凧を買ってきてやるようにと、母親は息子に言います。母の提案にすぐ、万年筆を返して地球儀と凧を買ってくると兄は答えます。母子とも眠れぬ思いで朝を迎えたのでしょう。息子も自分の方から言い出そうと思っていたかもしれません。『物価の文化事典』（森永卓郎監修、2008年、展望社）によると昭和十年前後、鉛筆（三菱）一本三銭から五銭、金ペン（パイロット）は五円から七円だったそうです。九十五銭の万年筆はどのようなペン先だったか分かりませんが、決して安い買い物ではありません。中玉のリンゴが一個五銭くらい、うどん・そばのもり・かけがいっぱい十銭から十三銭の時代です。高い勉強代ですが、息子が学んだものは大きかったでしょう。親子の信頼感がうかがえる作品です。当日集まった会員からは、我が身に置き換えて、さまざまな感想が出ました。

年の離れた兄弟というと、三郎と兄の銑三の関係が思い起こされます。三郎は高等科一年の頃、兄が名古屋市立図書館に勤めていた時、兄の下宿に泊まって兄のふとんで一緒に寝たこと、舞台協会や坪内逍遥の「家庭用児童劇」、宝塚少女歌劇などを見せてくれたことを書いています（「水雑炊」1986）。銑三は上京後も母の手製の足袋や着物を身につけ、いくつになっても母の思いに包まれ、温かく抱かれたまま暮していたのだと回顧しています。この「とんび凧」には、そんな森家の親子兄弟関係とどこか通じるものを感じます。

今の子どもたちは、スマホなど無い時代に冬の夕暮れ時を一人で悩みながら歩く主人公の気持をどのように受け止めるでしょうか。

しばらく子どもの心理を描く現実的な作品を読み続けていて平安朝を舞台にした「柏野大納言」（初出『赤い鳥』一九三二年五月号）を読むと、とても新鮮な感じでした。「物くさ太郎」のような少年が都へ出てうまく行かずに帰りかけると、清水の観音に子を願っていた夫婦に巡り合い、夫婦の子どもになって柏野大納言にまで出世する話です。展開の奇抜さ、表現の面白さから、三郎は本当にこのような滑稽味のある作品が気に入っていたのだと思わされました。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品　（十一月十三日実施予定）
「赤穴宗右衛門兄弟」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）